22　現代っ子と親に物申す

ーー対談・理科よもやま話からーー

「理科教育についてのさまざまな思いを語ってほしい」という依頼で，話し合ったことが奈良新聞社の水村勤さんの手でまとめられ，「理科よもやま話『現代っ子と親に物申す』」として連載されたのは，昭和55年のことであった。ここでは，知識偏重の理科になる原因の１つとして評価の問題も取り上げ，さまざまな自然への取り組みを通して，

「自然とはすごいものなんだなあ。美しいものなんだなあ」

という気づきをした子どもを高く評価してやりたいが，

「おー，そのことに気づいたか。よっしゃ，君は５だ！」

というわけにはいかないと話している。

以下に引用したのは，その３回目の記事である。読み返してみると言葉たらずのところがあったり，そう言い切れるかなと思うところもあるが，20年が経過したことを感じさせない点もあるように思う。

ーー現代っ子が身のまわりの自然に目を向けない背景として，受験戦争のひずみや生活環境の変化が挙げられてきたが，最終回はまとめとして，では「われら何をなすべきか」について討論を移していきたい。

【竹中】子どもたちを動物園に連れて行っても，「ウサギがいるよ」「僕知ってる。絵本で見たもん」式の答えが返ってくる。ウサギは手にしたら温かいし，心臓が脈打っていますね。これは絵本ではわかりません。手ざわり，においなど，５感を働かせて自然と触れることがないんですね。「きたない」と言って親は子どもと動物を引き離してしまいますが，生物というのは素晴らしいつくりを持っている。

ーー子どもの目を自然に向けるには，どうしたらよいでしょうか。

【竹中】このあたりの家を見たら，どこも庭には芝をきれいに植えています。ここが芝生，そこが花壇と決めたら雑草がふえないように引

き抜いてしまう。ミミズが出たら殺してしまう。ところがミミズは土を食い，耕してくれる。それで植物が生きるのです。
【山本】理科の勉強というより遊びの中で，子どもたちはいろいろ見たり触れたりするわけですが，塾が忙しいのか，土いじりでも虫いじりでもいいのですが，遊ぶことが欠けているのですね。
ーーしかし，遊ぶといっても時期があるのではないでしょうか。
【竹中】やはり，小さい時でしょうね。まさか，高校生になってもセミとりばかりしていては困るんで。（笑い）
【山本】僕が子どもの時の経験ですが，カブトムシにものすごく興味があって飼っていた。ある日，２・３日旅行に出て帰ってきたら，足を伸ばしてカゴから出ようとして死んでいたのですね。やっぱり，生物の偉大さとかすぐれた面よりも「１つの生物を殺してしまった。かわいそうなことをしてしまった」という体験が，次からいじめようという心をなくしますね。自然界の生物は生きようとしているのですね。「生命を大切にしよう」と言葉で言ってもなかなか実感がないし，やはり遊びの中で学びとらせていくしかないのでしょう。
ーー自然に入ろうとする芽を親が摘んでしまっているのでしょうか。
【山本】遊ぶ時間があっても，泥だらけで虫を追ったりすることを親が否定してしまう。子どもはしかたなしにテレビかマンガを見ることになってしまうのでしょうか。
【竹中】芽を摘まないと同時に積極的に自然に入れるように援助してあげることですね。休みにどこかに出かけるにしても，遊園地ばかりでなく，ぶらぶらと野山を歩いて，ヒョコンと腰を下ろしたら，そこには虫がいっぱいいて，サワガニがガサガサしている。そんな経験の中から，子どもたちがいろいろな発見をするのと違うかな。
【山本】小さい時は何も知らなくてもいい。ただ，自然の中で見たり

さわったりという経験が大切だと思う。

【竹中】原っぱの中に入ると，種がいっぱいつく。イガでくっついたり，あるものはカギのようなものでひっかけたり。これは，生物の知恵なんですね。名前を覚えたりすることも大事ですが，覚えたら１丁あがりというのでは困ります。生物のいろんなしくみを見つめて，自然界の面白さをつかんでほしいですね。

――どうもありがとうございました。

現代っ子と親に物申す

理科よもやま話（中）

生駒市立生駒南中教諭　山本　吉延

竹中　良行

前回は先生たちが思い思いの自然に目を向け子，知識の偏っている実態をつかい生駒南中の竹中良行教諭＝と山本吉延教諭＝に語ってもらった。なぜそうした状態に陥っているのかを進めていく。

身近な自然に気づかない

―自然に囲まれているのに子供たちは自然に入っていかないことに問題があるのですね。

【竹中】そう，入っていかない。身のまわりの自然を見ていればいいのですね。しかし，子供たちはなかなかそもそもないわけで，たとえば，雑草でもいっぱい自然で「ママごとは雑草と雑草が合ゆ」なんて言い方を知って育てる。昔の子供の遊びが見なくなっているのですね。

やっぱりそれが一番それがいちばんいいことになる，ということ。両親に分かるようにはなる。下を向いて見ないで，上を向いて見なければいけないのかなと思います。

【山本】理科の教師がキャンキャンやイチゴ，ブドウ，子供たちはいろいろ言うと「へーん」で「ほーっ」でしまいます。また，農家の方などの「ウワー，そんなことをしたら」と言ってしまうわけで，自分で情報の収集の仕方を知ることがいい教師がたくさんいるのですね。

―無気力にならないようにしようか。

【竹中】ちょっと違うと思うな。いろいろ手をかけすぎるのではないかなと思ったりするのが，知識ばかりの中にいろいろ手を出す多い人，子供たちの，わかるようになる，学校の先生が教えるのもおかしいのですが，与えられるものがないと動けなくなってしまう。

昔はたくさんのものを一つ一つ，ちょっきりそれをトンボかろ，ろ人，家にいても遊ぶものは自然がないと教えられたが，自然が無機的にはかなければ，食い物も与えられない。自然は身でつくるものだろうし，やはり先生方は教えすぎたのでしょうね。

評価の方法に問題

【山本】いろいろなところに責任があるのでしょうね。受験戦争とかいろいろなものがあるのでしょうけど，現在の高校の問題をテストでしてしまうでしょう。僕と同様の教育は任意にならないためのですが。やっぱり教科書の通りのストーリーの中で「できる」ということになる。自然を見て，試行錯誤を繰り返すようなことも，何かちがうのではないかと思います。

―ものあたりのキャップを埋めることは難しいのでしょうか，いかがでしょう。

【竹中】やっぱり，なぜかやっぱり自然があるから勉強するのでしょう。問題，答案用紙を見ようとすると，「百点！」「ほー，わかった，よろしい」「悪いというわけにはいかないで，可能性を考えなきゃいけないですね。

（つづく）

竹中教諭

山本教諭